

特集

これから活躍する君へのメッセージ

もっと仕事ができるようになりたい

若手技術者たちへの 手紙

先輩のようにもっと仕事を任されたい。日々の業務に慣れるにつれ、思うように仕事を進められない自分に苛立ちを感じることはありませんか？ 実は先輩たちも皆さんと同じ道を歩んでこられました。先輩方からの心のこもったメッセージをぜひ読んでみてください。きっと皆さんの心に響く解決へのヒントが得られるはずです。

Special Interview

若い今だからこそもっと学べることもある！ 2
飛鳥建設(株) 経営監理室 担当課長 赤荻 博明

 気がつけば妻も同土だった!! 4
株大本組 東京本社土木部 次長 丸山 功

 素直な心が成功への道 6
林建設(株) 土木部 次長 榎戸 時雄

 背伸びしすぎず一歩一歩確実に 8
安藤建設(株) 土木事業部 工務部 課長 石塚 浩造

Interview

どうせ苦勞するならカッコイイ主任をめざせ! 10
みらい建設工業(株) 東京支店 副支店長兼土木部長 金子 光男

Special Interview

若い今だからこそ

もっとと学べる

ことがある！

飛鳥建設(株) 経営監理室 担当課長 赤荻 博明

「もっと仕事ができるようになりたい」とのコンセプトだそうです。大丈夫かな？ 私にそんなときがあったなんて思い出せないけど笑。

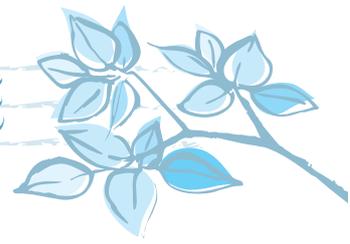
冗談はともかく、今、若い人たちに勧めたいことは「与えられた仕事はどんなものでも懸命にやりなさい」ということ。それと「いろんな人とコミュニケーションがとれるようになりなさい」という2つです。

🍀 経験を積ませてもらえるということ

「与えられた仕事」を「懸命にやりなさい」というのは、要は「その仕事の経験がどこかで必ず役に立つよ」ということです。たとえば、現場では若い人たちに掃除やコピーとり、あるいは現場の後片づけなど、あらゆる仕事をしてもらいますが、でもそれは、若い人たちに

さまざまな経験を積ませたいという、こちら（上司や先輩社員など）の意図があつてのこと。それを、独りよがり「これは自分の仕事じゃない」「雑用ばかりで（学生時代の）専門知識のひとつも生かせない」などと勝手に決めつけてくれるな、と言いたいのです。

たとえば、測量ひとつにしてもそうです。測量を実際に経験してみなければ、杭や抜き板、トランシットなどといった器材がどれくらい必要になるとか、時間あたりでどの程度の仕事がこなせるかといったカンはいつまで経ってもつかめない。それでは、いざ後輩が入ってきたときに「測量に出かけるから準備をしておけ」なんてカッコよく指示を出せないでしょう。つまり、仕事が“できる・できない”というのは、実は場数によっても支えられてい



る面があることは忘れてはならない。だから、どんな仕事でも経験を積みさせてもらえることは「ありがたい」と思ってほしいのです。

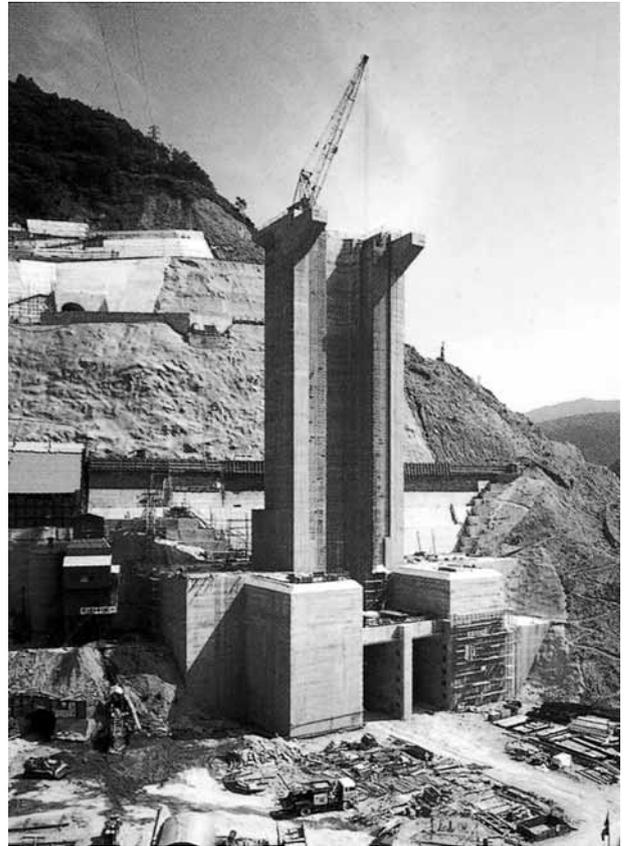
🌸 仕事の基本は「人と人の関係」

ところが、そうやって苦労して積んだ経験も、さまざまな人とうまくコミュニケーションをはかれないようでは、それが“宝の持ち腐れ”になってしまう可能性があります。

建設業の仕事というのは、多種多様な人たちが集まって遂行されますから、その前提には「人と人の関係」があるのは明らか。だとすれば、一緒に仕事をした人から「また、一緒に仕事をさせてください」と言われることはあっても、「もう、二度と一緒に仕事したくない」と言われることは、あってはならない。もし、そんな人がいたら、とても仕事は任せられない。

さらに、今の時代は社の内外ともに厳しい対応が求められ、昔のように(些細な失敗であれば)「頭を下げればなんとか」といった余裕は、どこの会社にもなくなってきているのが現実です。言い換えれば、それだけ失敗が許されないということです。このような状況下では、上司や先輩たちとのコミュニケーションを上手に築き、つまらない失敗を防ぐためにも、いかにその経験を活用できるかが重要であることに気づいてほしい。

どんな仕事であれ、上司や先輩たちは、若

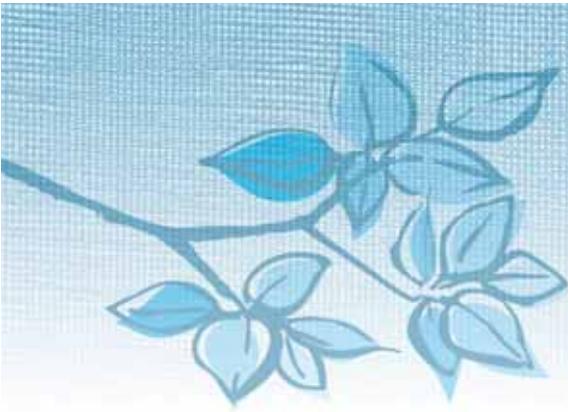


赤荻氏の原点ともいえるダム現場。入社して初めて携わった現場で、イキイキと働く氏の姿が目にかぶ。

【工事件名】 手取川第一発電所本体 2 工区
【発注者】 電源開発(株)
【工 期】 昭和49年6月～昭和54年12月

いあなたたちがこれから通る道を、もうすでに通り抜けた経験があるわけです。それゆえ「これは些細なことかな」「こんなことを聞いたら怒られるかな」と思っても、カッコつけないで、ありのまま相談してみるといい。

本当は上司や先輩たちというのは、今まで培ってきた経験を教えたくてウズウズしているものなんです(笑)。きっと、思っていた以上の収穫が得られると思いますよ。



気がつけば妻も同士だった!!

(株)大本組東京本社土木部次長

丸山 功

建設業界で昼夜を問わず奮闘されている若手技術者の皆さん、毎日の精励、お疲れさまです。私は結婚して今年で25年目になりますが、先日、妻とともに22年ぶりに岡山県の倉敷を訪れました。ここは何を隠そう、私たち夫婦が新婚時代を過ごした思い出深い土地なのです。25年前、本四連絡橋関連工事で3年間、私たち夫婦は倉敷で暮らしていました。その間に長男が誕生し、その後、私の転勤とともに全国行脚が始まったという、私たちにとっては特に思い入れのある土地です（ちなみに、家族を連れての引越は5回までで、後は単身赴任となりましたが……）。

ところが、倉敷を訪れなかった22年の間に思い出の地は一変していました。新しい道路網によりすっかり街並みは変わってしまい、あのころ慣れ親しんだ店の多くは姿を消し、新婚時代を過ごした当時の面影はほとんど残っていないなど、その変化の大きさに戸惑いを覚えずにはいられませんでした。

とはいえ、それだけ周囲が変わっても、ひとつだけ変わらなかった場所があります。そう、22年の歳月を経てもなお、凛としてその役目を全うしている本四連絡橋ほかの構造物。若かりしころ、現場で見た構造物そのままの姿を見て、あらためて驚くとともに、土木屋として言いようのない感慨を覚えたのでした。

そのときです。隣で同じ景色を観ていた妻が「すごい工事ネェ。お父さんはこんなに大きな仕事をしていたんだね」としみじみと呟きました。その言



葉を聞いた瞬間、ただひたすらにつくる喜びに浸り、現場が完成していくことに唯一のアイデンティティを見いだしていたあのときの自分を、仕事に忙殺され家庭サービスもままならない夫の帰りを待ち続けてくれた若き妻の姿を、まざまざと思い出さずにはいられませんでした。

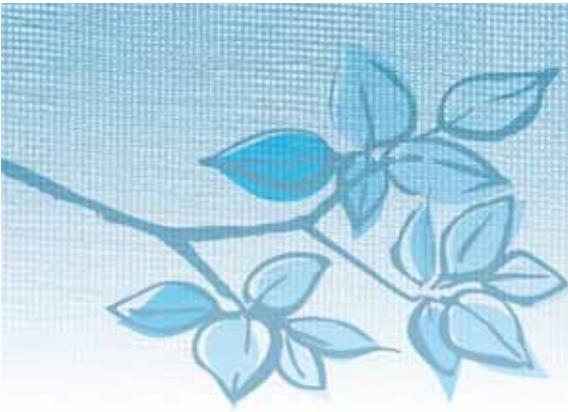
「そうか、隣にいる妻も、役割こそ違って同じ時間を共有した同士だったんだ」

すでに結婚している諸兄、またこれから希望される皆さん、人生の最後の最後は“たった独り”とはわかっている、現場にはかけがえのない仲間がいて、家には陰でサポートしてくれている家族がいる……。これはとても大切なことだと思います。

どんな苦勞があろうとも、いや、むしろ苦勞すればするほど、人生という名の時間をともに過ごした人の存在は何ものにも代えられません。工事の大小・種類を問わず、また家庭においても「熱中し」「完全燃焼し」「自分の仕事に誇りをもって人生を生きぬくこと」は、まさしく貴兄が生きた証といえるに違いありません。

皆さんがいつの日か、奥さんとともに自分の携わった現場を訪れたとき、ほろ苦い思い出とともに当時の熱い情熱が蘇ってきたとしたら……。きっと、あなたの人生はけっこうおもしろいものだったといえるのかもしれませんが。





素直な心が成功への道

林建設(株) 土木部 次長

榎戸 時雄

若さと希望に満ちた土木技術者の皆さん、そして今年はじめて現場に出られた新人技術者の皆さん、毎日ご苦労さまです。

もう現場にも慣れて、良いとき・悪いとき・楽しいとき・辛いときと、いろいろな場面に遭遇されていることでしょうか。これからいろいろな経験と勉強をしながら、一人前の技術者と呼ばれるように日々努力をしなければなりません。そこで、ここでは参考として、私が若いときにある上司から言われた言葉をご紹介します。

💡 あなたは気づいていないかもしれないけれど.....

その上司は、あるとき私にこう言いました。

「あなたは気づいていないかもしれないけれど、今の時期はとても大切なときなのだよ」

つまり、こういうことです。あなたのイメージは入社時から3年の間に、良くも悪くも「決められてしまう」というのです。たとえば 彼は明るく前向きであるとか 彼は物静かすぎて作業員に指示ができないのではないかと いうように、上は「あなたの評価を勝手に決めてしまいがちなのだ」と私に諭したのです。当時の私は「冗談じゃない。こちらのことを何もわかっていないうちに一方的に決めてしまうなよ」と心の中で反発したことを覚えています。

ところが、そんな私も今は部下を持つ身になり、あのときの上司の言葉が少しずつ理解できるようになってきました。



🍷 悪いイメージの払拭は難しい

人のイメージというのは、一度、決められてしまうと、それをを変えるにはなかなか時間がかかります。ですから、会社に入ってから3年間はよほど自らの振舞いを心がけていけない限り、周りによくないイメージを与えかねず、つまらない気苦労を背負い込むことになります。

このことは、逆にいえば、会社に入ってく早い段階で「よいイメージ」を相手に植えつけてしまえば、「その後（の仕事）はグッと楽になる」という可能性の暗示ともいえます。当時の上司はこのことを私に言いたかったに違いありません。よいイメージを相手に植えつけるために難しい理屈はありません。ただ、「明るく素直な心で、元気に挨拶、ハッキリした受け答え」。これだけです。

🍷 素直な心で

私たちが携わる土木事業は、社会資本（インフラ）をつくる公共工事が主であることから、特に正しいもの、良いものをつくることが要求されます。このことを念頭に置いて仕事をしてください。

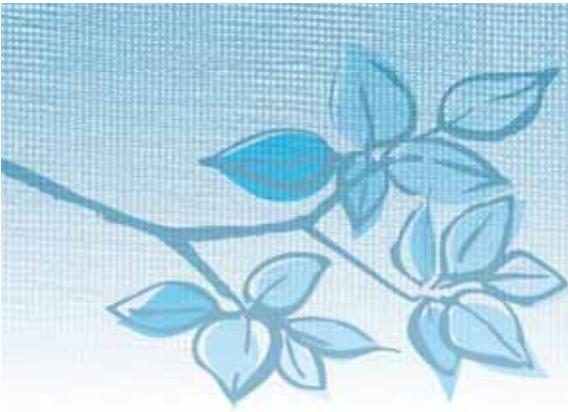
土木工学というものは自然相手であり、1つとして同じ現場はありません。立派な技術者と呼ばれるまでには、これからいろいろな壁に突きあたり、悩み苦しむと思いますが、そのときはどうか周りを見まわしてみてください。

あなたたちは、決して1人ではありません。同期や先輩・協力業者など、いろいろな人がアドバイスを与えてくれ、助けてくれます。それは、あなたが素直な性格で皆に好かれたからだと思ってください。

素直な心で事にあたることは、必ず自分の向上に役に立ちます。素直な心を持ち続けましょう。これから1つのチームの一員となって役割を全うしながら勉強をして、良い技術者になってください。

皆さんの健闘を祈ります。





背伸びしすぎず一歩一歩確実に

安藤建設(株) 土木事業部 工事部 課長

石塚 浩造

若手技術者の皆さん、とりわけこの春に入社された新人技術者の皆さん。

皆さんは社会人として、あるいは土木技術者としてどのような毎日をすごされていますか？

皆さんが土木の世界に足を踏み入れたのは、きっと学生時代に「大きな物をつくってみたい」「多くの人が喜ぶ顔を見たい」「物づくりの達成感を得たい」など、誰かのために《少しでも役に立ちたい》という純粋な気持ちがあったからだと思います。

でも、会社に入って時間が経つと、そういった気持ちが少しずつ薄れていくことはありませんか？ そもそも土木技術者というのは、多くの人たちからどんな期待が寄せられているのか、わからなくなることはありませんか？

土木という仕事は、高い視点で考えるなら「国や地域など（人間が生活する場所と置き換えてもいいですが）の社会基盤整備を通して、よりよい快適な生活を将来にわたり守りとおしていくこと」がその定義になると思います。多くの人から感謝される仕事であり、大きな達成感を得られる仕事ではありますが、その道のりは決して平坦ではありません。今、皆さんが置かれている立場は、険しい道のりを乗り切るために、皆さんの会社が皆さんに投資している段階だと思ってください。貴重な人材、金の卵として、一人前の社会人・土木技術者たるべく欠くことのできない土台を築く時期だと思っていただきたいのです。



では、どうしたらしっかりとした土台を築くことができるのでしょうか？
結論を申し上げるなら「ローマは1日にしてならず」。つまり、しっかりとした土台づくりに「近道はない」ということになります。

ただし、近道がないかわり、われわれ技術者には積極的に行動し、一步一步を着実に踏みしめていく能力があります。何も理解しようとせず、一歩も動かない状況では何も吸収できません。若いころの失敗は大きい声では言えませんが、許されます。しかし、その失敗から原因を究明し、同じ過ちを二度と繰り返さない姿勢だけは忘れないでください。技術者であれば、失敗から「何を」学んだかはとても重要です。

昔から土木の世界では「KKD」= 勘 (Kan) と経験 (Keiken) と度胸 (Dokyou) という言葉がありますが、一人前の技術者になるためには、これに《知性》を加えることが何より重要です。土木の仕事は自然を相手に物づくりをしなければなりません。「KKD」だけでは自然を読み切ることはできません。技術者として冷静かつ合理的な態度で自然に臨まない限り、自然はいつか大きなペナルティーを皆さんに科すことでしょう。

業界のこれからを担う若い土木技術者の皆さんには、今は「自分の将来のために大地にしっかりとした土台をつくる時期なんだ」という意気込みで仕事に邁進してもらいたいと思います。

これからの皆さんの大いなるご活躍に期待しています。

Interview

どうせ苦勞するなら カッコイイ主任を めざせ!

みらい建設工業(株) 東京支店 副支店長兼土木部長 金子 光男

「カッコイイ」という言葉に何をイメージしますか？
私はこの言葉を聞くと、若いときに現場で見たある先輩の姿を思い出さずにいられません。

会社に入って現場に配属されたばかりの私にとって、その現場の主任だった先輩は、本当にカッコよかった。その主任の指示どおり、現場がまるで生き物のように動いていくんです。見ているこちらが気持ちよくなるくらいに職人や作業員たちがテキパキと働いて、工事がいかにも「進んでいく」という感じがした。

ところが、私が同じように指示を出しても、現場は思うように動いてくれません。つまり、指示を受ける側にしてみれば、「アイツの言うこときいて大丈夫かいな？」という感じで、そもそもあんまり信頼してくれていない(笑)。言われたとおりに動くのはいいけど、「後で手戻りでも起きやしないか」と思われているだけに、どうしても動きが遅くなるというわけです。

現場というのは、非情というかずいぶんハッキリしたところがあって、職人や作業員たちが「今度入ってきたあの若いのはまだまだ力不足だな」と判断すると、とたんに反応が鈍くなります。一方、現場で6年とか7年くらい経験を積んだ主任クラスが指示を出すと、その主任より年上の職人たちが、まるで弾かれたように動き出す。

仕事をしっかりと覚え、周りから一目置かれるような存在になれば、現場は自然に動いてくれるものなのです。

もちろん、一目置かれるようになるためには、それなりの努力は欠かせません。

私は駆け出しの頃、大学ノートに「午後2時から4時30分まで6人で t の鉄筋を組んだ」とか「今日は朝から作業員が来て の仕事を8人でやった」、あるいは「資機材の手配ミスをあの前先輩は××優先で捌いていた」というように、毎日、事細かに書きつけていました。

今ではさすがにノートを見返すことはなくなりましたが、ノートをつくって養ったカンは決して侮れない。私が主任となって後輩から相談を受けたときに、「この程度なら10人でいける」とか「今の状況ならあの現場で試した方法が使えるよ」と即座にいえるようになったのも、地道にノートをつくっていたからだと思っています。

土木の場合、相手が自然そのものであるだけに、苦勞が絶えることは決してなく、それは宿命なのです。どの道を通っても苦勞するのです。それならば、せめて後輩から「あの先輩はさすがにカッコイイ」と言われることをめざしてください。その「カッコヨサ」こそが、土木屋としての自分を支えていく矜持きようじになるかもしれませんよ。